

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第36集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成12年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成 12 年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

館 林 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、平成12年度に国宝重要文化財等保存整備事業・群馬県文化財保存事業の補助金を受けて実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。

2. 本調査において報告する遺跡の「遺跡台帳」に基づく名称は次のとおりである。地点名は、館林城跡・城下町が「旧館林藩士住宅」、他の遺跡が「平成12年度調査地点」である。

日向古墳群(ひなたこふんぐん)	萩原遺跡(はぎわらいせき)
館林城跡・城下町(たてばやしじょうせき・じょうかまち)	申子遺跡(さるごいせき)
外加法師遺跡(そとかぼうしいせき)	林遺跡(はやしいせき)
大袋5遺跡(おおぶくろごいせき)	宮内遺跡(みやうちいせき)

3. 発掘調査及び資料整理は、館林市教育委員会が主体となり実施したもので、調査組織は次のとおりである。

教 育 長	大塚 文男				
教 育 次 長	笠原 進				
主 管 課	文化振興課				
文化振興課長	今井 敏				
文化財係長	阿部 博				
学 芸 員	岡屋 英治	黒澤 文隆(担当)	阿部 弥生	原 幸恵	
主 任	高橋 一哲(担当)	主事補	釜島 美貴		

4. 発掘調査参加者については、次のとおりである。

坂田 岩吉	石井 悦雄	高瀬 広	橋本 嵩郎	大沢平八郎	小林 俊彦
小林 浩子	川島 範子	新井 真人	横田 秀輔	田中 祐介	関口 優子

5. 調査による出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。

6. 発掘調査及び資料整理、本書の編集・執筆については、黒澤、高橋が中心となり行った。

7. 調査の実施から本書の刊行にあたり、下記の諸氏、諸機関のご協力をいただいた。ここに記して感謝申しあげる次第である。(順不同、敬称略)

高橋 一郎	山田 由紀	花本 和弘	武井 高雄	大木 勝江	鈴木 雷蔵
小曾根嘉信	田村 隆男	半田 公作	篠原 久雄	半田 政一	篠原 久
半田 政男	中島 喜作	遠藤 洋子	毛塚 栄	中島 一郎	西條 篤
亀田 一郎	長浜 昇	亀田 義男	長浜 実	増田 喜雄	橋本 兼雄
毛塚 洋文	遠藤 チョ	遠藤よし江	田部井喜作	山田 一雄	遠藤 常三
中島 米蔵	青野 吉実	中島新次郎	藤倉 正一		
谷田川北部土地改良区協議会	館林市花山土地画整理組合	上毛歴史建築研究所			
佐倉市教育委員会	群馬県教育委員会	館林市文化財調査委員会			

〈目 次〉

例 言

目 次

図版目次

写真目次

第 1 章 館林市の環境…………… 1

第 2 章 各遺跡の調査…………… 3

1 日向古墳群…………… 3

2 外加法師遺跡…………… 7

3 館林城跡・城下町…………… 9

4 萩原遺跡…………… 16

5 大袋 5 遺跡…………… 18

6 甲子遺跡…………… 21

7 林、宮内遺跡…………… 25

参 考 文 献

抄 録

〈 図 版 目 次 〉

図 1	館林市の位置図	1
図 2	館林市の地形概念図	1
図 3	館林市の現況と調査遺跡の位置	2
図 4	日向古墳群・付近現況図	3
図 5	日向古墳群・トレンチ配置図	6
図 6	外加法師遺跡・付近現況図	7
図 7	外加法師遺跡・掘削地点位置図	9
図 8	館林城の概要図	10
図 9	旧館林藩士住宅・付近現況図	10
図 10	「館林城絵図」・伊王野惣七郎	11
図 11	旧館林藩士住宅・建物現況平面図	13
図 12	旧館林藩士住宅・建物復元平面図①	13
図 13	旧館林藩士住宅・建物復元平面図②	13
図 14	旧館林藩士住宅・トレンチ配置図	14
図 15	萩原遺跡・付近現況図	16
図 16	萩原遺跡・トレンチ配置図	17
図 17	大袋 5 遺跡・付近現況図	18
図 18	大袋 5 遺跡・トレンチ配置図 (A 区)	19
図 19	大袋 5 遺跡・トレンチ配置図 (B 区)	20
図 20	申子遺跡・付近現況図	21
図 21	申子遺跡・トレンチ配置図	24
図 22	申子遺跡・4 トレンチ平面図	24
図 23	林、宮内遺跡・付近現況図	25
図 24	林遺跡・トレンチ配置図	28
図 25	宮内遺跡・調査区域図	29
図 26	宮内遺跡・トレンチ配置図 (A 区)	32
図 27	宮内遺跡・出土遺物 (縄文土器)	33
図 28	宮内遺跡・出土遺物 (須恵器坏)	33

〈 写 真 目 次 〉

写真 1	日向古墳群・調査地遠景	4
写真 2	日向古墳群・調査前の景観	4
写真 3	日向古墳群・表採埴輪	5
写真 4	日向古墳群・調査風景①	5
写真 5	日向古墳群・調査風景②	5
写真 6	日向古墳群・1トレンチ全景	6
写真 7	外加法師遺跡・調査風景	8
写真 8	旧館林藩士住宅・調査前の景観①	11
写真 9	旧館林藩士住宅・調査前の景観②	11
写真 10	旧館林藩士住宅・1トレンチ(旧玄関)	14
写真 11	旧館林藩士住宅・畚出土状況	15
写真 12	館林藩士住宅図面・長屋	15
写真 13	旧館林藩士住宅・1トレンチ(お勝手)	15
写真 14	旧館林藩士住宅・調査風景	15
写真 15	萩原遺跡・調査前の景観	16
写真 16	萩原遺跡・調査風景	17
写真 17	萩原遺跡・1トレンチ全景	17
写真 18	大袋5遺跡・調査前の景観	20
写真 19	大袋5遺跡・調査風景	20
写真 20	大袋5遺跡・1・2トレンチ全景	20
写真 21	大袋5遺跡・4トレンチ断面	20
写真 22	申子遺跡・調査前の景観	22
写真 23	申子遺跡・調査風景	22
写真 24	申子遺跡・4トレンチ全景	23
写真 25	申子遺跡・4トレンチ土坑	23
写真 26	申子遺跡・土坑遺物出土状況	23
写真 27	申子遺跡・土坑出土遺物	23
写真 28	林、宮内遺跡・調査地遠景	26
写真 29	林遺跡・調査前の景観	27
写真 30	林遺跡・調査風景	27
写真 31	林遺跡・1トレンチ全景	27
写真 32	宮内遺跡・調査前の景観	29
写真 33	宮内遺跡・調査風景	29
写真 34	宮内遺跡・2トレンチ全景	31
写真 35	宮内遺跡・2トレンチ溝址	31
写真 36	宮内遺跡・8トレンチ遺物集中箇所	31
写真 37	宮内遺跡・出土遺物(縄文土器)	31
写真 38	宮内遺跡・出土遺物(須恵器坏)	34

第1章 館林市の環境

1 地理的環境

館林市は群馬県の南東部に位置し、市役所の所在地(城町)で、東経 139 度 32 分 44 秒、北緯 36 度 14 分 30 秒である。市域は、東西約 15.5km、南北約 8.0 km と東西に長く、北は一部を除き渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町にそれぞれ接する。明和町南には利根川が東流し、県境となっている。県庁所在地である前橋市までは約 50km、首都東京(台東区浅草)へは約 65km の距離にある。

地形的には、関東平野の北西部にあたる。現在の標高は 15m 台(大島町東部)から 32m 台(高根町)の中に収まり、概ね平坦であるが、関東ロームに覆われた低台地と周辺の低地に大別される。低台地は、太田市高林から市中央部を東西に延び板倉町にまで断続的に発達した洪積台地で、邑楽・館林台地などの名で呼ばれている。市域の台地は、大泉町古海から館林市高根町に至る幅約 500m 程の低地帯により分断されている。

この低地帯は、利根川の旧河道と見られ、現況は逆川を含む農村地帯となっている。逆川を含む低地帯の右岸台地の縁には、幅約 200m 前後、高さプラス約 5 m 程の高まりが断続的に発達している。利根川旧河道に沿って帯状に分布することから、成因は河畔砂丘と考えられ、ローム層に覆われることから埋没河畔砂丘とも呼ばれる。館林市域分は、多々良沼の南東方の景観に代表されるように、アカマツを中心とする雑木林となっており、鞍掛山脈や毛氈山の地名がある。台地の周囲には、利根・渡良瀬川に連な



図1 館林市の位置

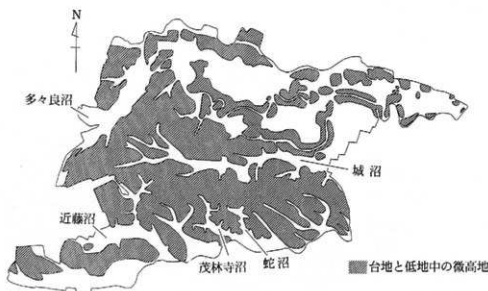


図2 館林市の地形概念図

る大小河川の氾濫原である低地が広がり、現況は農村地帯になっている。土地改変の進んだ現在は平坦化が進んでいるが、古い空中写真などの資料から、微高地や旧河道の窪地が観察できる。微高地中には中・近世に成立した集落の居住域となっている場所もあり、地形的に自然堤防と考えられていたが、関東平野の各地の沖積地内で遺跡が発見されていることから、ローム層が埋没している可能性がある。館林の市街地北西の県道（寺岡・館林線）沿の高まりは、建設省国土地理院発行の「土地条件図・古河」では自然堤防と表記されていたが、発掘調査の結果ローム台地であることが判明した。台地の縁辺部は低地から延びる谷（雨水の集水域）が樹枝状に開析し、茂林寺沼をはじめ大小の沼や湿地帯が形成され、その景観は、本市の特徴の一つになっている。

2 市内の遺跡

『館林市の遺跡』に記載されている本市の遺跡数は、推定地や中世城館の伝承地を含め144である。散布地及び集落址は112あり、多くは低い台地上に立地している。時代別には、旧石器時代3、縄文時代13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代0、古墳時代から平安時代96（うち縄文を含むもの23）である。縄文時代の後期から古墳時代初頭の遺跡が少ないことが特徴として挙げられる。低地において実施したシンウォールサンプリャーによる試錘調査によると、縄文時代（約3000年～2000年前）には、低地の一部が乾燥し、その後埋没が進んだことが推定されており、上記の特徴とのかかわりが想起される。

発掘調査により住居址が検出した遺跡としては、高根・外和田遺跡（古墳）、伝右工門遺跡（古墳）、道満遺跡（古墳初期）、大袋・遺跡（縄文）、間堀遺跡（縄文）、岡野・屋敷前・岡遺跡（縄文）、下堀工道満遺跡（平安）、北近藤第一地点遺跡（古墳）、南近藤遺跡（古墳・奈良）、尾曳町1遺跡（古墳）、八方遺跡（古墳）、大袋城遺跡（古墳）、大袋4遺跡（古墳）、大道北遺跡（古墳）、加法師遺跡（縄文）などがある。全体としては土地の人工改変の影響が大きく、保存状況については良好とは言えない。その他の遺跡としては、古墳17（延25基）、中世生産址1、中世城館址12及び近世城館址2が記載されている。

古墳については、

昭和13年刊行の『上毛古墳総覧』（以下本書では『古墳総覧』と表記する）に67基の古墳が記されている。開発により墳丘は失われているが、平成6年度の発掘調査により周溝の一部が確認された下遺跡の例などから、今後も周溝等が発見される可能性がある。



図3 館林市の現況と平成12年度調査遺跡の位置

第2章 調査の概要

1 日向古墳群

【立地と環境】

日向古墳群は、東武鉄道伊勢崎線多々良駅の北東約300m、館林市日向町（旧日向村）の集落のある台地の西端に位置する。日向集落の居住域が立地する台地は、邑楽郡邑楽町の石打や中野から続く台地の東端にあたり、大泉町古海から板倉町まで延びる邑楽・館林台地とは多々良沼を含む低地により分断された形となっている。調査地の西北方向には矢場川が蛇行しながら流れ、ほぼ県境となっている。また日向町は東の多々良川が木戸町（旧木戸村）との境となっている。

矢場川の周辺は数多くの古墳が分布する地域である（図4参照）。足利市南部には中日向古墳群をはじめ、高松古墳群、久保田古墳群、小曾根古墳群などが分布し（『足利市遺跡地図』）、邑楽町には雷古墳や横町古墳、浅間神社古墳や松本古墳群が分布している（『邑楽町の遺跡』）。松本古墳群内の古墳の調査（23号墳、毘沙門古墳）では、川原石を使った主体部等が検出されている。

昭和13年『古墳総覧』によると、当時の多々良村（現日向町、木戸町、高根町、西高根町、北成島町、成島町、大谷町、赤土町等）には延59基の古墳が存在していた。その多くは、高根（31基）と日向（24基）に集中していた。同書によれば、日向には宝性寺と長良神社に比較的規模の大きい古墳が存在したとある。

しかしながら日向の古墳群のほとんどは昭和期に開発され、昭和63年の『館林市の遺跡』に登載されたのは僅かに5基である。『館林市の遺跡』は、字台・原・最ノ神にまたがる東西約350mの範囲を遺跡と推定しているが、字台の宝生寺南方の農地から36号墳の周濠が検出されていることから、日向台地の北部のほとんどを占めた可能性がある。



図4 付近現況図

【調査の概要】

日向町字最ノ神 814-3 の土地の発掘調査は、地権者高橋一郎氏の同地における露天駐車場開発に伴う事前調査として実施した。館林市教育委員会文化振興課は、同地東の隣接地に古墳と推定される土盛（写真2参照）が残ることから、周濠等が残っている場合、開発予定地にかかる可能性があることを踏まえ、協議の結果、事前に試掘調査を実施することになった。



写真1

調査地遠景

『古墳総覧』には字最ノ神の古墳として12基が記載されている（第42・43号、49～58号）。登記簿原本を調査したところ、日向最ノ神付近の地番は昭和中期から変更がされていないが、長良神社（『総覧』の地番・字下262、現在の地番・字下239）や宝性寺（『総覧』の地番・台甲603、現在の地番・字下240）の地番が現在の地番と違っていることから、現在地への比定は困難である。今回の調査地隣地北部に残る古墳は、字名や地番が一致することから、『古墳総覧』に見える第53号墳である可能性が高い。『古墳総覧』の第53号墳の記載事項は次のとおりである。

第53号墳	土地	最神814
	規模	不明
	高さ	記載なし

調査地及び付近の標高は26m台、西方の農地が23m台、矢場川の河原が21m台である。東側隣接地土盛の高さは



写真2 調査前の景観

調査地の地表面からプラス 1.6m を計測した。墳丘と捉えるには形状がかなり変形していたものの、南北規模約 12m、東西約 4m の範囲が残り、一帯には川原石や埴輪片が散布していた。地目は宅地で、敷地の北西端にあたり、川原石を段のように並べた形跡から屋敷鎮守が祀られていた可能性もうかがえた。昭和 40 年代以前の館林地方の民家の屋敷取りは母屋の北西を屋敷林（防風林を兼ねる）とし、多くは屋敷鎮守（稲荷）を祀っていた。

調査地の地目は畑であるが、聞き取り調査によると、昭和初期の現況は山林だったという。「封内経界図誌」（安政 2 年）や「迅速測図」（明治 17 年）の表記もほぼ同様である。山林を開墾し農地としたものと推定されたが、近年は休耕していた時期もあり、「館林市都市計画図」（昭和 52 年）は竹藪と表記している。

表探遺物としては埴輪片数点が認められた（写真 3 参照）。

調査は、隣地土盛に近い部分から東西方向に 2 本のトレンチを設定し、北から 1・2 トレンチとした。周濠の跡が土盛からかなり離れた位置に残る可能性があることも踏まえ、2 トレンチ中程から南方向へのトレンチも設定し 3 トレンチとした（図 5 参照）。

土重機により自然層の残る深さまで掘り下げたところ、竹根が横に張る他、地表下約 30cm 以上に達するビニールを含む新しい攪乱層があり、人為的に掘り込んだ形跡がうかがえた。

トレンチ内清掃作業は、土盛に近い 1 トレンチを中心に行い、断面から関



写真 3 表探埴輪



写真 4 調査風景①



写真 5 調査風景②

係遺構の存否・残存状態の把握を試みた。この結果、西（填丘側）から約2.4mのあたりから約10mの長さで、ローム土を積んだ形跡が見られた。このローム土は粘性は弱いものの締まりが強いことから、填丘の築土層の一部と判断した。しかし周濠跡については確認されなかった。トレンチ中には、ビニールを含む攪乱や山林を開墾した時期のものと思われる古い攪乱層が見られ、これにより周濠跡があったとしても、破壊されているものと思われる。

トレンチ内からは土師器や埴輪の小破片が数点出土したが、特筆するものはない。表面採集による埴輪は、円筒部が中心で、形象のものは人物の腕部の破片1点である。全体的に埴輪の色調は赤褐色であり、焼成は良好である。胎土中には砂を含み、中には5mm大の小石を含むものもある。表面は刷毛目調整で、刷毛目幅1cm6～9本とばらつきがある。裏面は撫で調整のものと刷毛目調整のものがある。突帯のあるものが二破片あるが、その断面を見ると、一つが三角形、他方がM字形である。



写真6 1トレンチ全景(西より)

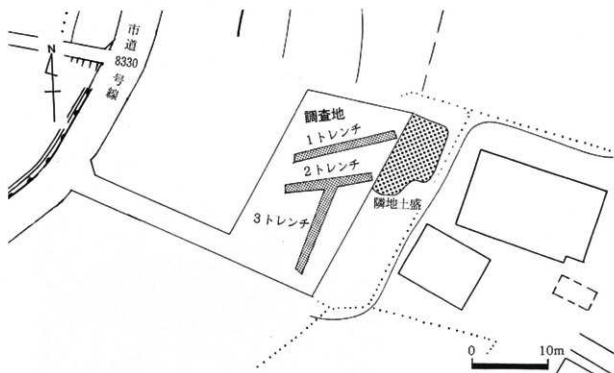


図5 トレンチ配置図

2 外加法師遺跡

【立地と環境】

外加法師遺跡は、館林市の中央部、市役所の北東方向約 1000m、館林市立第二中学校地内に位置する。地形的には邑楽・館林台地の北に連なる微高地上に立地する。近世後期館林城の北東端の郭（近世絵図面には中間町と表記され、加法師郭と呼ばれる）の範囲の外であり、「土地条件図・古河」は自然堤防と表記している。遺跡の北には渡良瀬川に連なる沖積低地が広がっている。

現在の所在地は館林市加法師町であるが、遺跡名は遺物散布が確認された当時の地名に基づいたものと思われる。縄文土器が散布していたが、学校建設（昭和 35 年）に伴い破壊された。『群馬県遺跡台帳・東毛編』（昭和 46 年）や『館林市の遺跡』（昭和 63 年）には、破壊された遺跡として記載されている。

周辺（邑楽・館林台地とそれに連なる微高地）には、城町遺跡（奈良～平安、宅地化）、尾曳町 1 遺跡（古墳時代）、加法師遺跡（縄文・奈良～平安）、若宮遺跡（土師器の散布地）などが分布する（図 6 参照）。このうち発掘調査により住居址が検出され、集落址であることが判明したのは加法師遺跡（縄文時代の集落址）と尾曳町 1 遺跡（古墳時代の集落址）である。

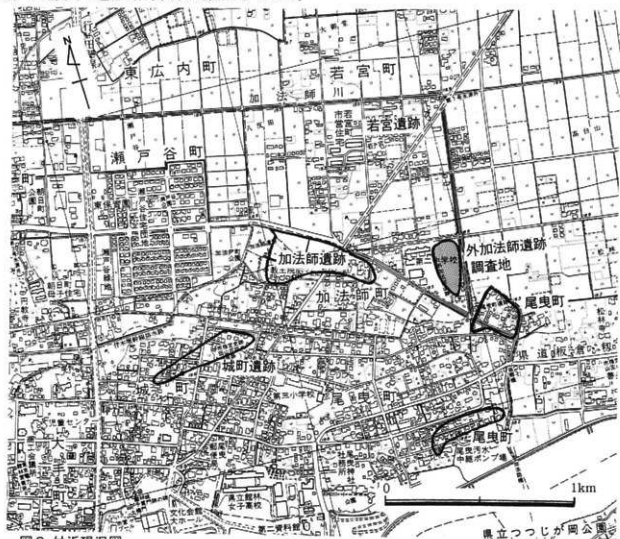


図6 付近現況図

遺跡地の調査時の現況は校庭となっており、「館林市道路台帳」に見える標高は18m台で、平坦化されていた。南方の館林城跡との境は、市道、河川（伴木堀幹線排水路）、原野、蓮田、宅地（埋土）となっている。蓮田部分の標高は17m台を測り、第二中学校校庭南のプール辺りから西南方向を谷頭とする浅い谷が入っていたことがうかがえる。「土地条件図・古河」にも同様な窪地が描かれており、昭和22年の空中写真からは湿地であったことが確認できる。現状は土地改変が著しく、旧地形の復元は難しい。学校用地西方の標高は19m台で校庭よりやや高く、教室棟や屋内運動場が建ち並んでいる。東方は河川（加法師川）、北方は農地及び宅地となっている。昭和30年代に造成が行われたため、発掘調査の例はない。学校用地となる前は農地として土地利用されていたという。遺跡地及び付近のボーリング調査の事例は3地点あり、この資料によると表土は埋土であるが、地下については、遺跡地北方の農地と普通教室棟西端付近が湿地、管理特別教室棟東南（遺跡地内）辺りがローム台地であることが明らかになっている。

【調査の概要】

館林市加法師町 2711 他 1 筆の土地の発掘調査は館林市第二中学校仮校舎建設に伴う事前調査として実施した。当遺跡については、遺跡台帳では破壊された遺跡として周知しており、敷地内のボーリング調査により現地表下約1.5mの深さが埋土層であることが確認されていたが、地形的にローム台地であることなどから建物予定地の地下の状況を確認する必要が認められ、協議の結果、試掘調査を実施することとなった。

調査は建物の建設区域のうち5箇所を掘り下げ、断面から地下の状況を確認した。この結果、確認された自然層は粘性の強いハードロームであった。調査地南部のトレンチでは表土から約60cmの深さまでが埋土であり、地表高がボーリング調査地点より50cm程高い。他の4箇所のトレンチの自然層が出てくるレベルもほぼ同様であり、校庭造成に伴う工事もしくはそれ以前にローム層を大幅に掘削していることがうかがえ、遺跡台帳通り破壊された遺跡であることを確認することができた。

試掘調査終了後、工事立会を実施したが、遺物は確認されていない。

今回の調査により、外加法師遺跡は自然堤防でなくローム台地に立地していたことが判明した。館林城跡の外側の微高地上の遺跡で、ローム台地であることが判明したものには、他に八方遺跡（岡野町、坂下町）や加法師遺跡（加法師町）がある。

江戸時代中期に成立した文献史料『館林記』他）には、長尾氏時代の館林城には城の北方に城下町（町家地区）があったことが記されていることを付記しておく。



写真7 調査風景

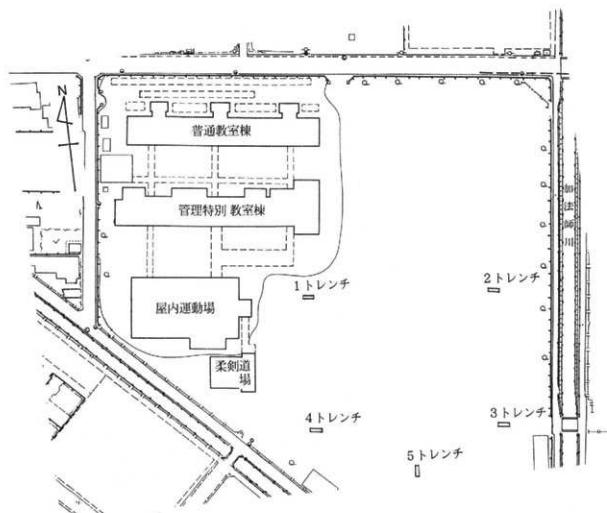


図7 掘削地点位置図

3 館林城跡・城下町(旧館林藩士住宅)

【館林城の概要】

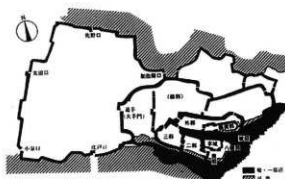
館林城跡・城下町は、現在の館林市城の中央に位置する。地形的には邑楽・館林台地の中で、城沼を形成する開析谷の北側にあたる。城の中心である牙城部は城沼に突き出した舌状台地を選地したもので、江戸時代後期には、本丸、二の丸、三の丸が串状に並び、本丸の周りに南郭と八幡郭が配され、本丸から二の丸へは南郭を経て行き来する形となっていた。本丸の北の堀は入江堀と呼ばれ、対岸の台地には稲荷郭、外郭、総郭が配されていた。総郭は武士町に当てられ、大名小路、鷹匠町、裏宿、内伴木、外伴木などの町名があった。牙城部と武士町の西には、東西約1200m、南北約1000m程の土塁や堀に囲まれた区域があり、町家地区となっていて、寺社、町人町、一部の下級武士の屋敷地にあてられていた。一般的に城下町とは、大名の居城を中心とした都市で、牙城部、武士町、町家地区全体を含むが、館林では町家地区のこを指す言葉としても用いられている。

館林城の築城時期は明らかでなく、現時点での文献上の初見は文明3(1471)年である。室町時代後期の足利成氏(本拠地下総古河)と関東管領上杉氏(本拠地武蔵五十子)対立期に、沼沢地を巧みに活かした古河公方側の軍事施設として存在していた。徳川家康の関東入国後、榊原康政が10万石で入城し、同氏の時代に城郭は、牙城部の北に武士町、西に町人町を置き、城城の多くを土塁で囲む近世都市として再整備された。江戸時代は中絶期を挟み7家17代の大名の居城として、城下は城付領内の中心地として栄え、

秋元氏の時代に廃藩を迎えた。文政7年や明治7年の大火などにより、旧城域の建築物の多くは焼失した。

明治後期には二の丸跡に進出した繊維工業を中心に近代化を遂げ、江戸期の遺構の多くは消失した。堀は旧町家地区北に断続的に残るのみである。土塁は牙城部跡（本丸・三の丸）や旧町家地区北西（第一中学校北）にまともに残る他は、旧城区域に点在する。建築物は未調査の物が多く、江戸期にさかのぼるものは僅かである。社寺は屋根の葺替等の改築が進み、町家は看板建築（正面にタイルや銅板をはったり、モルタルでぬりかためた建物）を含め切妻屋根の建物がいくつか残っているが、棟札等で年代が確認された物はない。武家屋敷は、田山花袋旧居（移築）と今回の調査地のものの2棟の現存を確認している。

発掘調査例は、三の丸、本丸、総郭土塁（朝日町、加法師町）などがある。



※江戸時代後期の郭の配置

図8 館林城の概要図

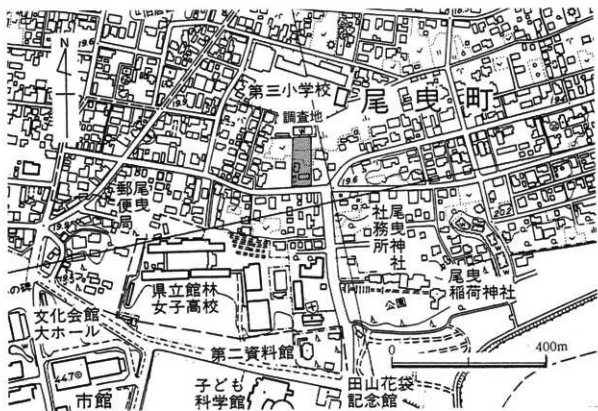


図9 付近現況図

【調査地の立地と環境】

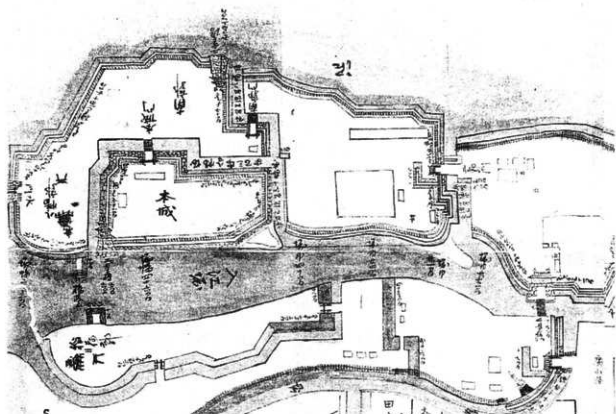


図10 「館林城絵図」(秋元時代)・伊王野惣七郎

今回の調査対象となった尾曳町90の土地は、館林市役所の東北方約450mに位置し、館林城跡の総郭内にあたる。江戸時代には外件木と呼ばれた武士町の中であり、「館林城絵図」(秋元時代)によると、同地には伊王野惣七郎の名が見える(図10参照)。伊王野惣七郎の名は「旧館林藩士族録高職氏名調」(明治4年8月の調書を基に昭和12年に編纂したもの)にも見え、「元高…100石、割合…40石現米…24石、改正現米…24石、旧藩時代職名…留守居役」となっている(表記は原文のまま)。明治初期の



写真8 調査前の景観①(南方より)



写真9 調査前の景観②(調査地に保存されていた武家屋敷)

地籍図（「館林町全図」）の土地所有者も同じである。調査時（平成12年8月）には江戸後期の建築と推定される茅葺屋根の旧武家屋敷（市指定重文「旧館林藩士住宅」）が現存していた（写真8・9参照）。明治7年の館林城大火は武士町西部から季節風により、牙城部を焼いたものの、調査地は延焼を免れた。有者である山田家は旧秋元藩士で、伊王野家とは養子縁組などで深い関係にあった。明治中期に伊王野家が東京に移り住むにあたり、山田家の持ち家となり、今日に至ったという。「館林城絵図」には、伊王野惣七郎の東4軒隣に山田庄太郎と記されている（図10参照）。現存する建物は、間口約八間半、奥行約三間程の規模で、中級以下の武家屋敷特有の各室を横一列に連結した間取り（横一列型）である（図11参照）。群馬県内でも数少ない現存する武家住宅の一つであり、平成11年10月館林市の重要文化財に指定された。「館林市道路台帳」に見える敷地周辺の標高は19.5m内外であり、主家南の庭には、マツ、ヒイラギ（鉢植え）、モミジ、ツツジなどが植えられており、現況観察から、所在地は江戸時代から大きな造成が行われていない可能性が高いものと判断した。

館林藩士の住宅関係の図面資料としては「館林藩士住宅図面」（館林市立資料館蔵）が現存する。年代は記載されていないが、図面中に見える林友紀、蟻川弘人、樋山十郎、福井金平、岩田彦雄などの名前が「館林城絵図」と一致するので、秋元藩士のものであることが裏付けられた。中上級武士の独立住宅40以上、多数の長屋がその内訳である。しかしこの資料の中に伊王野家のものは残っていない。

【調査の概要】

館林城跡・城下町（旧館林藩士住宅）の発掘調査は、尾曳町90に所在する武家屋敷の解体移築に伴う事前調査として実施した。建物は平成11年10月18日付で館林市指定重要文化財に指定されたが、文化財指定申請と並行して、所有者より館林市に対し寄付の意向が示されており、市では平成12年度において解体し、その材を保管施設に運搬し、当分の間保管することになった。建造物の現況調査は、指定に先立ち、館林市教育委員会文化振興課と上毛歴史建築研究所（桑原稔所長）が実施し、聞き取りや目視可能範囲の観察に基づく推定復元図（図11参照）を作成したが、後世の改造箇所（お勝手場、玄関、便所等）については、解体時に痕跡調査や旧礎石の発掘調査を行い、復元の精度を上げる必要があると考えられた。調査地は近世の遺跡であるが、文献資料（「館林城絵図」）などから埋蔵文化財としての重要性を認められ、また解体後所有者側に住宅を建設する予定という事情を踏まえ、地下の状況を確認するための調査を実施することが望ましいと判断した。なお、調査地の遺跡台帳上の名称は館林城跡・城下町であり、郭の名や建築物の性格からは総郭武家住宅跡（旧伊王家住宅）となるものの、本書では便宜上、指定文化財の名称（旧館林藩士住宅）を地点名として使用した。

調査は、建物の解体調査（上毛歴史建築研究所による柱部分他の痕跡調査）の対象が基礎に及んだ段階で着手した。設定したトレンチは、①旧玄関とお勝手場を南北に結ぶ線（1トレンチ）と②主屋南西の便所から南方向（2トレンチ）の2本である（図14参照）。

〔旧玄関〕現況調査時、仏間の南側を玄関としていたが、聞き取り調査などから当初は仏間と茶の間にはさまれた桁行9尺を玄関の間と称し、この部分の南北から出入りをしていたものと推定していた。

この部分のトレンチでは、現地表5～10cmの深さで固く叩きしめられた土層が見られた。ある程度の範囲で広がる事が確認され、当初の土間跡と判断した。

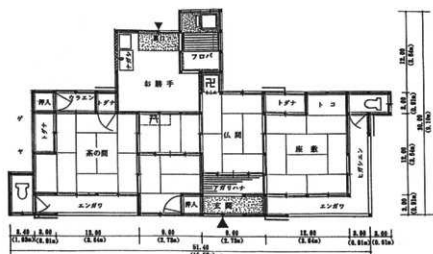


図 11 旧館林藩士住宅・調査前平面図

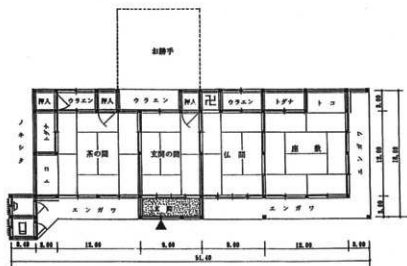


図 12 旧館林藩士住宅・推定復元図①（目視できる範囲の観察に基づく復元）

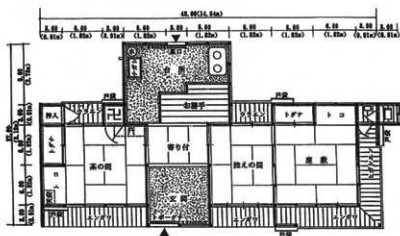


図 13 旧館林藩士住宅・推定復元図②（発掘調査結果を加味した復元図）

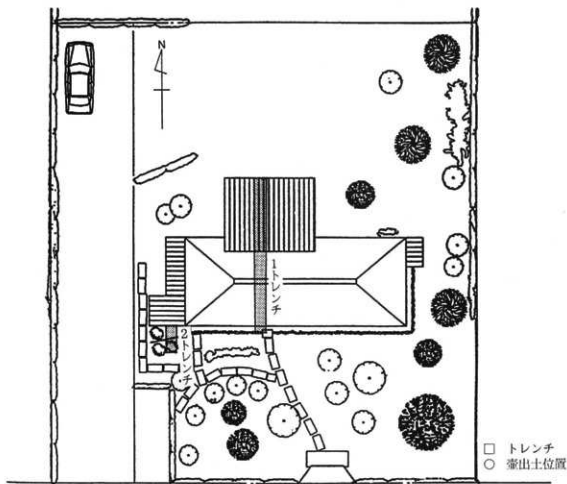


図14 旧館林藩士住宅トレンチ配置図

旧玄関入口より北へ1間半程の場所では、東石と思われる石が見られた。旧玄関の北部の土層には叩き締められた形跡はないことから、元は縁台にあたる施設の床下だったものと思われる。この場所における特筆される出土遺物には壺がある。この壺は、旧玄関を入った内側のやや西よりの土間跡から出土した（写真11参照）。一括であるが破片として出土したため、内部におさめたものについては確認できなかった。しかし、常時人の出入りがある場所から出土したことから、胞衣を納めて屋敷の下に埋めた埋納容器の可能性がある。人に踏まれる場所に埋めるのは、踏まれれば踏まれるほど丈夫に育つとか、野犬などに掘り起こされるのを防ぐなどの理由があるといわれ、各地に類例がある。武家屋敷に限ると、千葉県佐倉市の武井家住宅の発掘調査に同様な事例があり、同家では玄関の入り口と土間の入り口の2箇所から、合計9組の素焼きの浅鉢が出土している。



写真10 1トレンチ（旧玄関）

〔お勝手〕建物北のお勝手部分は、現況調査において後世の改造が施されていることがうかがえた。この区域のトレンチでも旧玄関の部分同様、地表5～10cmの深さで固く叩きしめられた土層が見られ、面的に広がることが確認できたことから、土間の跡と判断した。また、この区域でも、旧玄関同様素焼きの壺が出土している。

〔便所〕調査時、便所は主家の東北部と南西の2箇所洋式のものが設けられていた。平成8年時の聞き取り調査によると、南側の便所は、廊下の突き当りに小便所を設け、南に接して大便所を設けていたという(図12参照)。さらに、大便所へは、廊下から三角形の通路が設けられていたという話もあった。「館林藩士住宅図面」中の長屋にも同様な形式が見られる(写真12参照)。

調査はこうした形式を確認するため、現在の便所から南方へトレンチを設定、掘削した。この結果、痕跡は確認できず、江戸時期には主家南西の便所はなかったものと判断した。

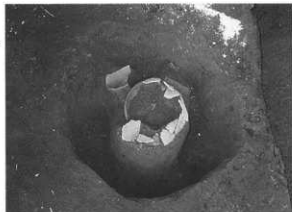


写真11 旧玄関出土壺出土状態

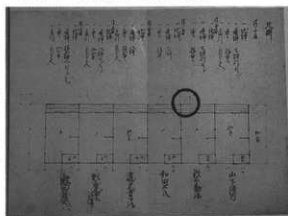


写真12 「館林藩士住宅図面」長屋



写真13 1トレンチ(お勝手)



写真14 調査風景

確認調査終了後の記録作業については、建造物の解体調査に引き継ぎ、復元図作成の資料とした(図13参照)。解体された建物については、将来復元整備が計画されている。本調査の記録資料は、指定文化財保存修理に関する資料として保管している。

4 萩原遺跡

【立地と環境】

萩原遺跡は、本市の南部、東武鉄道伊勢崎線茂林寺前駅の西方約1000mに位置する。地形的には邑桑・館林台地の南部にあたり、西は近藤沼を形成する低地帯、東は旧東沼から延びる谷（現況は苗木幹線排水路）に挟まれた舌状台地上に立地している。『館林市の遺跡』作成に伴う遺跡分布調査において、大字青柳（当時）字堀の内・萩原・苗木・苗木西にわたり縄文及び平安時代の遺物の散布が認められ、代表地番のある小字名に基づき命名された。南北約1000m、東西約400mを範囲とする。周辺の遺跡としては、同じ舌状台地の南部に青柳城跡（中世城館伝承地）、台地西部に苗木遺跡（古墳・平安）、苗木西遺跡（平安）が分布する。

萩原遺跡の既往調査に平成3年度実施の試掘があるが、中世以前にさかのぼる顕著な遺構は検出されていない。今回の調査地は遺跡の推定範囲の中央やや南寄りに位置し、平成3年度調査地点の隣接地にあたる。西北の苗木幹線排水路付近との標高差は1.5mを超える。地目は畑であるが、調査時は休耕し、草地となっていた（写真15参照）。



写真15 調査前の景観

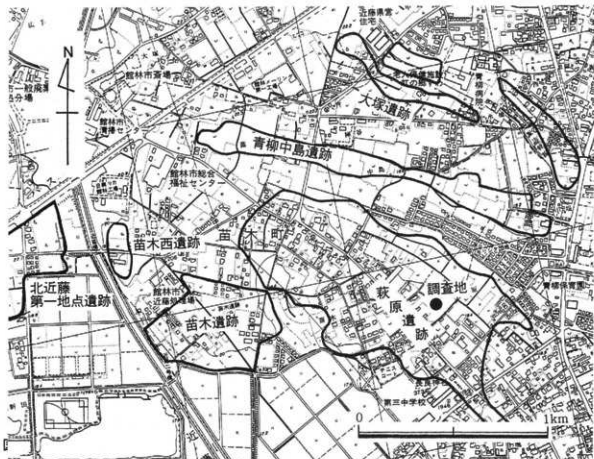


図15 付近現況図

【調査の概要】

萩原遺跡の発掘調査は花本和弘氏の苗木町字萩原 1853-7 の土地における個人専用住宅建設に伴う事前調査として実施した。調査地は前項で述べたとおり、平成3年度調査地点（字萩原 1853-6）の東側にあった。隣地では溝址の他、芋穴と思われる掘り込みが見られたのみで、特筆される遺物も出土していない。また、約20cm内外の掘削深度で自然層であるローム土が露出することから、かなりの規模の土地改変が及んでいることが判明していた。溝址は東南部から北西部の方向に延びるものであるが、出土遺物はなく、形態や覆土からみても、中世以前にさかのぼるものではない。地形の高い東南部は擾乱層により破壊されていたが、北西方向に延びていることから、湾曲もしくは蛇行していた場合、今回の調査地にかかる可能性があった。



写真16 調査風景



写真17 1トレンチ全景

調査はこうした隣接地の調査結果を踏まえ、開発予定地の北部に2本のトレンチを設定、掘削し、地下の状況の把握を試みた（図16参照）。

耕作土の厚さは平成3年度調査地点より深く、約50cmを測った。レベルを照合したところ、隣地の溝址の延長がかかっていたとしても、破壊されていることが判明した。また、遺物は特筆されるものは出土していない。

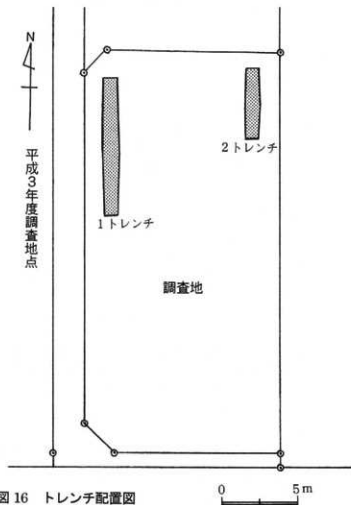


図16 トレンチ配置図

5 大袋5遺跡

【立地と環境】

大袋5遺跡は、本市の東部、館林市役所の東南方約1200m、群馬県立つつじが岡公園の南方約400mに位置する。地形的には城沼南岸の邑楽・館林台地上にあたる。遺跡の南方には古城沼から開析谷（現古城幹線排水路）が入り込んでいる。『館林市の遺跡』作成に伴う遺跡分布調査において、県道（つつじが丘線）の東西数箇所に遺物散布箇所が認められ、東西幅500mの範囲が遺跡と推定された。遺跡名は小字名に基づき、旧字大袋地内に遺物散布箇所が複数あることから、5が付された。大袋I遺跡とII遺跡は『群馬県遺跡台帳・東毛編』（昭和46年）の時点での記載、3～5遺跡は『館林市の遺跡』（昭和63年）の時点からの記載である。遺跡番号の表記の違いは記載時の基準に基づいている。

散布する遺物は平安時代と推定されている。周辺（古城沼周辺）には、大袋城跡（中世城館伝承地）、大袋3遺跡（平安）、大袋4遺跡（縄文・平安）などが分布する。既往調査に県道（板倉・初谷・館林線）開発に伴う大袋4遺跡、大袋城跡の発掘調査他があり、古墳時代中期の住居址が検出している。この調査により、大袋城跡は中世城館と古墳時代の集落との複合遺跡であることが明らかとなり、大袋城遺跡と呼ばれるようになった。



図17 付近現況図

大袋5遺跡の現況は一部の宅地を除き大部分が農地である。標高は20m内外で、東南方の谷との比高差は3m以上を測る。農地の形状は概ね方形であり、起伏はなく平坦化されている。「封内経界図誌」や「迅速測図」では表記が荒く土地利用の変遷は把握しにくい。昭和前期の「館林近傍図」では荒れ地と果樹園となっている。地元での聞き取りでは、大袋の地には桃畑や雑木林が多かったという。

【調査の概要】

大袋5遺跡の発掘調査は、花山土地区画整理事業における区画道路建設に伴う事前調査として実施した。館林市教育委員会は、平成11年の花山土地区画整理事業区域の計画決定及び組合設立後、区域内に所在する大袋5遺跡の取り扱いについて、館林市都市開発部区画整理課を通じ組合側と調整を進め、当該遺跡には既往の発掘例がないことを踏まえ、工事に先立ち、遺跡の保存状態、遺跡の範囲、遺構の有無などの確認を目的とした調査を実施することになった。

平成12年度工事は県道（つじが丘線）から東へ幅9mの区画道路を新設するものであり、調査の時点では、既存建築物や工作物（ビニールハウス）により分断されるため、西部をA区、東部をB区とした（図16参照）。

調査は道路予定地に幅1～1.5mのトレンチ7本を設定、掘削し、遺構等の確認を行った。A区のトレンチの自然層までの深さは25～40cmを測った。自然層を掘り込む部分のうち、中世以前に逆上る遺構と捉えられるものはない。1・2トレンチで南北方向に延びる溝が見られたが、現在の土地の境（3058-1と3023-2）の下にあたるので、近・現代の地境の跡と判断した。B区のトレンチは自然層までの深さは20cm以内（写真21参照）であるため、ローム面に達する人工改変により平坦化された土地と判明した。

遺物は、縄文土器、土師器、近世の陶磁器の小破片が少量見られたが特筆するものはない。

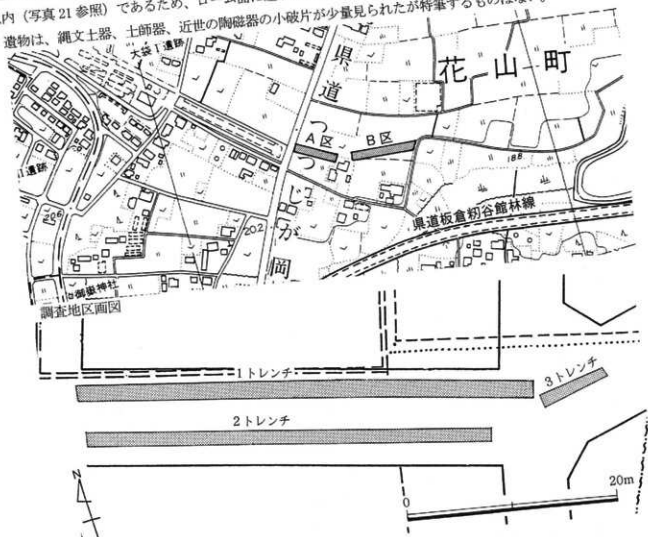


図18 トレンチ配置図(A区)



写真 18 調査前の景観（西より）



写真 19 調査風景



写真 20 1・2トレンチ全景

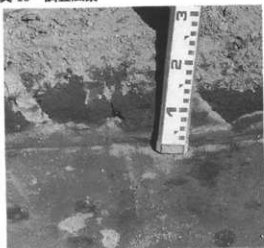


写真 21 4トレンチ断面

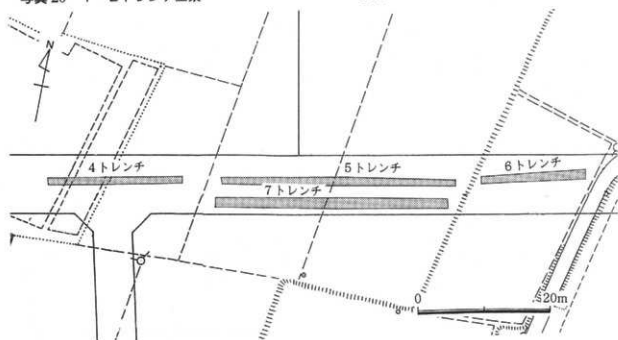


図 19 トレンチ配置図(B区)

6 申子遺跡

【立地と環境】

申子遺跡は、本市の南西端部、東武鉄道伊勢崎線茂林寺前駅の西方約5000m、館林市立第七小学校の西方約2300m、館林市野辺町(旧野辺村)の集落のある台地の南西に位置する。遺跡地の南方約400mには、新谷田川が東流し、邑楽郡千代田町の境になっている。地形的には邑楽・館林台地の南西部に該り、新谷田川から北西へ延びる開析谷の西面に立地している。標高は19m台から20m台である。南方の字長良前は流通業務団地になっているが元は沖積低地である。江戸時代、このあたりから南にかけて大輪沼という名の沼があったといわれる。嘉永3(1855)年「館林領五郡農家配水鑑」には、野辺(館林市野辺町)、萱野(邑楽郡明和町大字萱野)、大輪(同郡同町大字大輪)の間に板倉沼、城沼、近藤沼、多々良沼に匹敵する巨大な沼が描かれている。

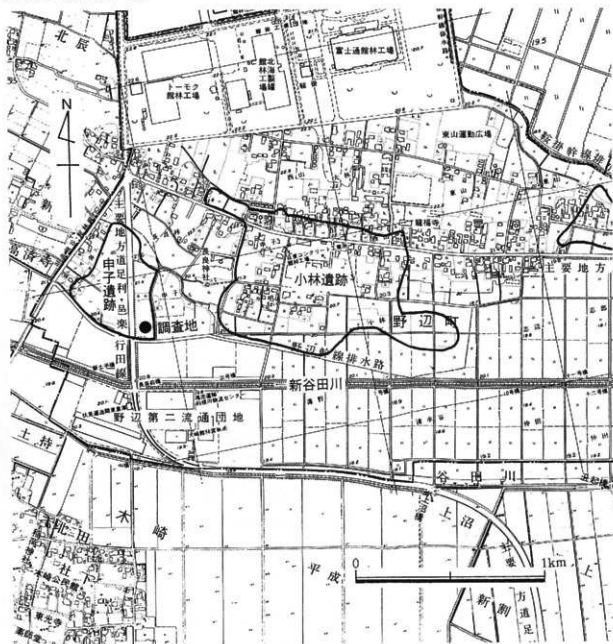


図20 付近現況図

申子遺跡は『館林市の遺跡』作成に伴う遺跡分布調査において、野辺町字申子地内の農地に遺物が散布していることが確認され、地形的に台地と推定された範囲が遺跡の可能性のある土地として登載された。名称は小字名に基づく。散布する遺物は土師器片であり、時代は平安時代と推定されている。周辺には小林遺跡が分布する。同遺跡は谷田川から北西へ延びる開析谷の東北面に立地する古墳時代から平安時代の遺物散布地である。遺跡地は邑楽郡千代田町、同郡邑楽町との境界近くにある。申子遺跡南方の千代田町大字鍋谷の微高地には、仲田1遺跡(旧石器、縄文)、同2遺跡(土師器)、前遺跡(古墳～中世)、行人塚(墳墓)が分布する。申子遺跡南方の邑楽町大字赤堀の台地上には本宿遺跡(古墳)が分布する(『千代田町の遺跡』)。

野辺町は都市計画法上市街化調整区域に位置づけられている場所であり、宅地開発は少なく、小林・申子両遺跡の発掘調査の例はない。

【調査の概要】

申子遺跡の発掘調査は、大木勝江氏の野辺町 1028-2 の土地における店舗建設と鈴木雷蔵氏の野辺町 1028-1 の土地における自動車展示場用地転用に伴う事前調査として実施した。「館林市道路台帳」に見える調査地の標高は 19.9m であり、西側の県道(主要地方道足利・邑楽・行田線)からは 1m 以上低い。調査地の東方は低地で調査地との比高差は、市道約 20cm、その東の農地約 70cm をそれぞれ測る。

地元における聞き取り調査では、調査地一帯は、かつて雑木林(アカマツ林)であり、昭和 40 年代に、農地に転用したという。県道西方に残るアカマツの縁辺部との比高差は 30cm を測り、採土により平坦化されたものと推定できる。地目は畑であり、夏季には景観作物が植えられていたが、調査の時点では休耕地となっており、散布する遺物も少なかった。

開発計画は、県道と同じレベルまで盛土を行うもので、店舗の浄化槽を除き、旧地表面の切土は生じない。しかしながら、当該遺跡での発掘調査例はないことを踏まえ、協議の結果、事前に確認調査を実施することとなった。調査は 1028-2 の土地を 1 次調査、1028-1 の土地を 2 次調査として実施した。

【1次調査】

調査地は東へ低地を控えているが、東部が建物建設予定であるため、トレンチは南北方に 5 本、約 5 m 前後の間隔を空けて設定した(図 21 参照)。東端の 1 トレンチでは、地表から約 80cm の深さまでが埋土で



写真 22 調査前の景観



写真 23 調査風景 (1次調査)

あり、旧地形は台地から低地への移行面と推定し、遺物も出土しないことから遺跡の範囲外と判断した。これに対し、調査地西部の4トレンチでは、耕作土を約15cmほど取り除くと自然層であるローム面が露呈することから、近年かなりの規模の採土が行われていることがうかがえ、調査地帯は西から東へ土を動かすことにより平坦化されたことが確認できた。

各トレンチ中からは自然層を削る掘り込みがいくつか見られたが、攪乱土を除去した結果、まとまった遺物や焼土を伴っていることが確認できたのは4トレンチ南部の土坑1基のみである(図22参照)。トレンチにかかる東半分のみ調査であるため、全容は不明であるが、確認面の南北幅約140cm、深さ約50cmの規模の碗状の掘り込みであり、5トレンチに広がっていないことや、焼土の密度が少量でまばらであることなどから、土坑と判断した。土坑の覆土中からは土師器片や川原石、縄文土器などが出土したが、出土位置が覆土上部であるため(写真26参照)、遺構に結びつくものとは捉えられなかった。また、トレンチにかかった部分の調査であるため、出土遺物も完全な形で復元されず、比較的まとまった形となったのは土師器の甕の胴下半部である(写真27参照)。色調は赤褐色を呈するが、外面は全体的に煤が付着している。外面と底部の調整は刷毛目。内部調整は不明瞭であるが刷毛目と思われる。底部径は7.8cmを測る。



写真24 4トレンチ全景(北より)



写真25 4トレンチ土坑



写真26 土坑遺物出土状況



写真27 土坑出土遺物

《2次調査》

1次調査の結果を踏まえ、地形的に台地と確認され、かつ遺物の出土した4トレンチを延長するような形で2本のトレンチを設定し、北を6トレンチ、南を7トレンチとした(図21参照)。6トレンチの地表高は、1次調査区域に比べ約30cm高くなっていたが、断面から盛土であることが確認され旧地表は北へ向かって緩やかに傾斜していたことがうかがえた。7トレンチは4トレンチ同様、約15cmでローム土が露出した。トレンチ南部は道路工事の影響か、現代の攪乱が入っている。両トレンチからも顕著な遺物や遺構は見られなかった。

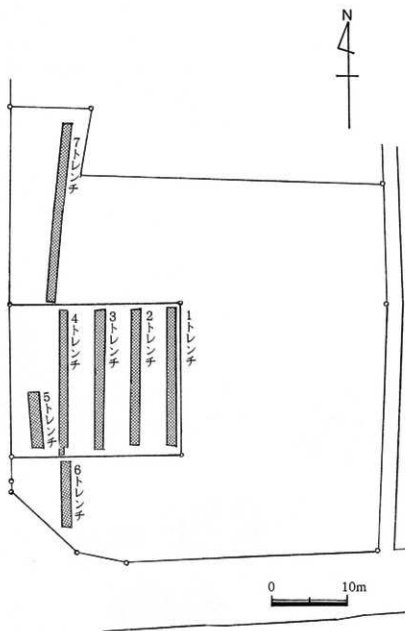


図21 トレンチ配置図

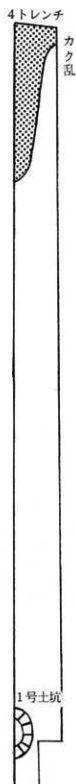


図22 4トレンチ平面図

7 林、宮内遺跡

【立地と環境】

林遺跡と宮内遺跡は、館林市の南部、館林市役所の南方約3000m、東北自動車道路館林ICの東方約1500mに位置する。南方には谷田川が東流し、邑楽郡明和町との境になっている。地形的には邑楽・館林台地の南部にあたり、谷田川から西北方向へ延びる開析谷（現況は現上赤生田1号幹線排水路及び周辺の原野）に臨む低台地上に立地している。林遺跡は谷の東側、宮内遺跡は西側にあたる（写真28参照）。宮内遺跡は、上赤生田1号幹線排水路と蛇沼を形成する低地（現在は蛇沼川が整備されている）に挟まれた舌状台地の先端部に立地し、南は谷田川の現河道になっている。このような位置関係から、自然堤防の部分がある可能性もある。

両遺跡共に『館林市の遺跡』作成に伴う遺跡分布調査において、遺物が散布していることが確認され、地形的に台地と推定された範囲が遺跡の可能性のある土地として記載された。名称は代表地番のある小字名に基づく。林遺跡に散布する遺物は土師器であるが、小破片であるため時代は推定されていない。宮内遺跡に散布する遺物は縄文時代、古墳時代、平安時代のものである。両遺跡共に既往調査例はない。

宮内遺跡の現況はほぼ全面農地であり、「館林市道路台帳」に見える標高は17.4m前後である。周辺低地との比高差は少なく、赤生田1号幹線排水路付近16.9m、蛇沼を形成する低地15.9m、谷田川河川敷16.1mである。林遺跡の現況は県道（今泉・館林線）の西側が赤生田本町の集落、東が農地となっている。標高は、県道の東が19m台、県道が18m台、西が17m台である。



図23 付近現況図



写真 28 調査地遠景
(谷田川より)

林、宮内両遺跡が立地する邑楽・館林台地南部は、谷田川を排水先とする谷により樹枝状に浸食され、多くの遺跡が分布する。現上赤生田 1 号幹線排水路の周辺の遺跡には、他に谷向遺跡（古墳～平安）があり、蛇沼を形成する低地に臨む低台地上の遺跡には、上ノ前遺跡（縄文）、神明前遺跡（縄文・古墳～平安）大原道東遺跡（縄文）、間堀 1 遺跡（縄文）、同 2 遺跡（縄文、平安）などが分布している。このうち、間堀 1 遺跡では、昭和 57 年度の発掘調査により縄文時代の住居址 7 軒が検出されている。

【調査の概要】

林、宮内両遺跡の発掘調査は、谷田川北部産業団地（仮称）建設に伴う試掘調査として実施した。この団地は、谷田川北部土地改良事業に伴う非農用地を実施区域とするもので、総面積は約 2.6ha に及ぶ。館林市教育委員会文化振興課は、土地改良の事業認可手続きと並行して、区域内に所在する林、宮内両遺跡の取り扱いについて館林市経済部農村整備課を通じて協議を進め、平成 12 年度に試掘調査を実施することになった。調査地のほとんどは、着手の時点で民有地（農地）であるため、試掘は耕作物の影響を配慮しながら実施した。

（林遺跡の調査）

林遺跡の南西方には現況赤生田 1 号幹線排水路となっている谷地が延び、水路周辺の現況は草原や蓮田になっており、調査時には開水域も見られた（写真 29 参照）。調査地はこの低地と県道に挟まれた区域で、県道から谷地に向けてゆるやかな傾斜地になっていた。市道 5237 号線沿の高さを県道部を基準に示すと、遺跡地北部地表マイナス 49cm、遺跡地南部地表マイナス 85cm、県道南方約 100m の蓮田の開水域の水面マイナス 170 cm を測った。『館林市の遺跡』では、赤生田本町字林を中心に県道の西約 20～50m 程の範囲を台地と見て遺跡地と推定していた。平成 8 年に土地改良計画と関係して実施された土壌調査の記録を確認したところ、遺跡推定範囲北部に隣接する土地（道路台帳では標高 17.1m）の資料があり、同資料によれば、地表下 14cm がグライ班の見られる暗褐色土層でローム土がないことが示されており、地形的に低地にあたりと判断されることから、県道西側の区域は、土が移動したことにより低地と台地の境が不明確になっている可能性も考えられた。

調査は、トレンチ設定に先立ち耕作土の厚さや旧地形を確認する必要が生じたため、人力による壺掘り（県道付近 2 箇所、低地側 4 箇所）を掘削した。この結果、低地側の 4 箇所全ての地点の覆土は暗褐色土層で、ロームは確認されなかった。寒冷期の調査にもかかわらず、湧水面は地表下約 80cm 深度を測った。

この壺掘りにより、調査地の西部の旧地形は赤生田1号幹線排水路に連なる低地帯であり、遺跡の範囲外であるものと判断した。これに対し、県道付近ではローム土が確認されたため、県道と交差する方向でト



写真 29 調査前の景観（南方より）



写真 31 1トレンチ全景（県道より）



写真 30 調査風景

レンチを設定し、地形的に台地である範囲の把握を試みた。

設定したトレンチは4方向（図24参照）で、西側から順に数字を付した。1・2トレンチは、土地利用形態の都合などにより2本に分かれたため、県道に近い方からA・Bとした。1・2トレンチは、県道から20m辺りまでが台地で、約35cm程の表土を取り除くと自然層であるローム面が露出した。確認されたローム土には採土が施された形跡があり、土地を平坦地化するに伴い人工的な改変が行われていたことをうかがわせた。3トレンチの覆土は暗褐色土層であり、県道付近からもローム土が見られないことから、同地点では県道東へも浅い谷が入っていたものと推定される。「館林市道路台帳」には、県道東に谷頭と思われる等高線（19m）が入っている。4トレンチ中にはローム土が見られたが、サブトレンチを設定して、掘削した結果、埋土であることが確認された。これら4本のトレンチからは特筆されるような遺物は出土していない。

以上の結果、調査地の旧地形は面積的に70パーセント以上が低地であり、北西方向の台地等から移動した埋土により平坦化された土地であるものと判断した。遺跡の中心は県道の北東側になると思われる。調査区域内でローム台地と確認できたのは、県道沿いの一部であるが、トレンチ調査した部分は採土されており、散布する遺物に結びつく遺構があったとしても、破壊されているものと思われる。

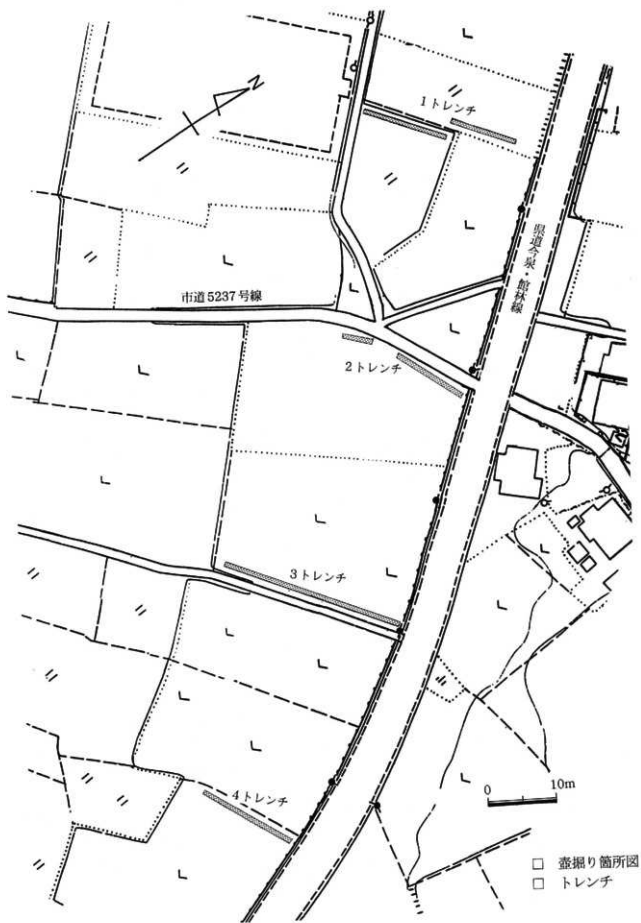


図24 トレンチ配置図

《宮内遺跡の調査》

宮内遺跡は、上赤生田町観音堂や駒形大明神などがある台地の先端部に立地する。「土地条件図・古河」には、観音堂の所から駒形大明神の北を通り、南東の谷田川近くまで延びる市道（5335号線）の両側に「台地上位面」の色分けがされている。この図は谷田川近くを自然堤防と表記しているが、土地改良計画に伴う土壌調査（平成8年）や地目変更に伴う掘削などから、市道5235号より南側は、ローム台地であることが判明している。また、遺跡の立地する台地には、駒形大明神東南方約600m程辺りに小さな谷が入っている。蛇沼川改修工事により低地帯の状態は大きく変わったが、「館林市道路台帳」を見ると台地部分より1m以上低くなっている。『館林市の遺跡』は、この谷の東西側の台地（標高17m台）のうち、市道に沿って南北50～70m、東西280m程の区域を遺跡と推定している。遺跡地の現況は道路部分を除き全面農地であり、地表は耕作地ごとに概ね平坦地になっていた。地元での聞き取り調査では、昭和40年代に調査地一帯に谷田川から水をくみ上げるために塩化ビニールの管が埋設されたというが、それ以後は大きな土地改変は行われていないという。

調査区域は遺跡推定範囲のうち東端の約14,000㎡を除いた範囲であり、私道5232号線を境に西をA区、東をB区とした（図25参照）。

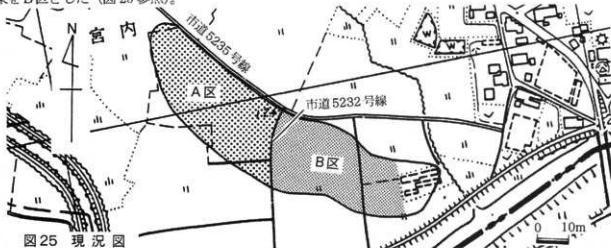


図25 現況図

調査は林遺跡と同様、表土層の厚さや旧地形を確認するため、12箇所の壺堀り（A区…5箇所、B区…7箇所）を行い、ローム台地と範囲と深さの把握を試みた。調査地の地目は畑が多く、裏作としては麦作が行われているが、春から秋にかけては水を張り水田として土地利用している。耕作土（表土）は10～15cm程度の厚さを測り、灰褐色土に植物繊維を含む層で、水田とする際には不透水路盤になる。その下に地元でマツチ（真土、質の良い耕作土）と呼ぶ褐色土層があり、これらを



写真32 調査前の景観
（市道5232号線より）



写真33 調査風景

除去すると、自然層であるローム土が露呈する。B区では自然層までの深さが1mを超えることが確認された。調査地は谷田川に近接しているため、河川氾濫の影響の可能性が考えられたが、土層観察の結果、覆土に砂質土が含まれていないことから、低いローム台地上を河川の氾濫土が覆っているという状況は考えにくい。地元での聞き取り調査によると、砂質土はスナメと呼ばれ、調査地付近では谷田川下流の十二社橋東方に分布するという。谷田川は、江戸期に大輪沼（19頁参照）から赤生田橋（十二社橋）まで拡張工事が行われており（『館林市誌・歴史篇』307頁）、また安政3（1856）年の洪水を初め何度も氾濫していることから、河川改修等の土木工事により多量の土が動いていることが考えられるものの、明治初年の地租改正時に作成された赤生田村の耕地絵図（群馬県立文書館所蔵、以下「地租改正時耕地絵図」と表記する）を見た所、B区の土地の形には大きな変化はなく、「迅速測図」や「封内経界図誌」などは表記の精度が荒いため、江戸期以前の土地改変を客観的に捉えることは困難といえる。以上のことから、B区は農地として土地利用する期間内の調査は困難と判断し、本年度はA区のうち、ローム土が確認された場所を中心に調査を進めることとなった。

設定したトレンチは延12本で、掘削順に番号を付した。12本のトレンチの表土は西南端の2トレンチを除き、非高差10cm以内の平坦地である。2トレンチ地表は他のトレンチの表土より30cm以上低い。地元での聞き取り調査によると、2トレンチ付近は切土により湿地側へ農地を広げたということであり、掘削結果も他のトレンチより浅い約25cmの深さでローム土が露出している。2トレンチ付近の土地改変については「地租改正時耕地絵図」と現在の地籍図との比較により裏付けられた。他の11本のトレンチの表土高はほぼ同じであるが、3・8・11・12トレンチなどでローム層を追いかけたところ、北へ向かって緩やかに傾斜していることが確認された。3トレンチ北方の市道5235号線近くの壺堀りでは、地表下約80cmが湧水面となることから、北方の低地（現上赤生田1号幹線排水路周辺の湿地）への移行面であり、遺跡の範囲外と判明した。

自然層までの深さは東西で大きく異なる。西端の1トレンチでは約30cmでローム土が露出するのに対し、東部の4～7トレンチは70cmを超える。水田の路盤より下の覆土は褐色土の中にローム粒子やブロックが混在するもので、5トレンチでは地下1mにも及ぶ攪乱中から現代の建築資材が出土することから、農地として土地利用されている間に、かなりの採土が行われていたことが考えられる。

調査の結果、時期不明溝址1条、遺物集中箇所3箇所を検出した。

焼土ブロックは11トレンチより西側のトレンチで延5箇所見られたが、断面を観察すると、表土下の攪乱中からの出土であり、遺構として捉えられるような状態では残っていない。

溝址は調査地の東西に延びる遺構で、2・3・9トレンチ中から検出した。断面は上幅60cm、下幅40cmの逆さ台形状で、遺構確認面からの深さは35cmを測る。ローム層を大きく掘り込んでいるが、帯水している形跡はない。土師器や近世の遺物が出土したが、底面から約30cmの高さからであり、溝址に伴う遺物とは捉えられなかった。また溝址底面レベルを測定した結果、東から西（湿地側）へ勾配があることが判明した。「地租改正時耕地絵図」には描かれていないことから、近世末から明治初期の農耕目的のものとは捉えにくい。

遺物集中箇所のうち、8トレンチのものは、南部の表土下約15cm程の深さから検出された須恵器の坏を中心とした一括遺物群である。焼土の粒子を伴うが、自然層を掘り込む部分でないため遺構とは捉えられなかった。自然層からの断面を観察すると、下より、①自然層、②褐色土、③粘土ブロック（焼土の粒子

を伴う)、④遺物、⑤表土(水田時の不透水層)となっている。出土位置が浅いことから原位置から動いたもので、耕作地として土地を改変する期間に投棄されたものと思われる。整理の結果、須恵器の坏4点と土師器の坏1点が復元された。須恵器のうち1点が部分的に2次焼成を受け、赤身を帯びている。須恵器の坏はほぼ同じ大きさで、口径12.4cm、底径6.0cm、器高4.0cmをそれぞれ測る。形状は逆ハの字状に開く。轆轤成形で、床面には回転糸切り痕がある。平安期のもものと推定。同様な形の物が6トレンチからも出土している。遺物集中箇所は、他にも10、11トレンチからも検出したが、遺物出土状態はほぼ8トレンチと同様であり、遺構として捉えられなかった。



写真34 2トレンチ全景



写真35 2トレンチ溝址



写真36 8トレンチ
遺物集中箇所

出土遺物は、縄文時代から近世にかけてのもので、総量コンテナケース2箱程となる。縄文土器は破片で出土しており(写真38、図27)、場所は調査地西北部に集中している。小破片が多く、何れも磨耗が激しい。焼成は不良、厚手、胎土中に多量の繊維が見られるものが多い。紋様は磨耗に



写真37 出土遺物(縄文土器)

より判読しにくい。斜行縄文、羽状縄文、条痕文などがある。土師器片は轆轤成形の物が多く、平安期と推定される。近世の遺物としては、陶磁器の小破片他に5トレンチからは寛永通宝8枚が出土している。

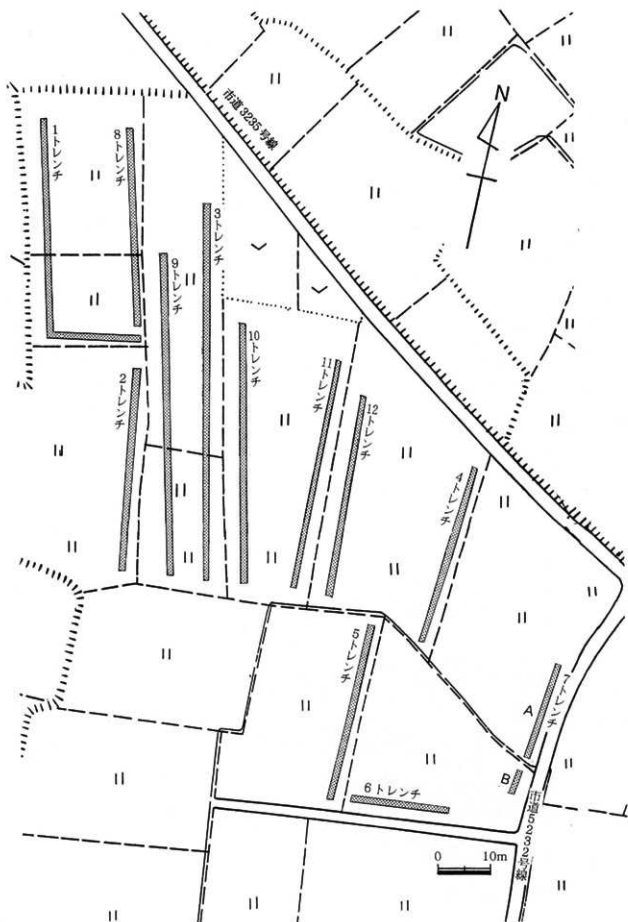


図 26 トレンチ配置図 (A区)

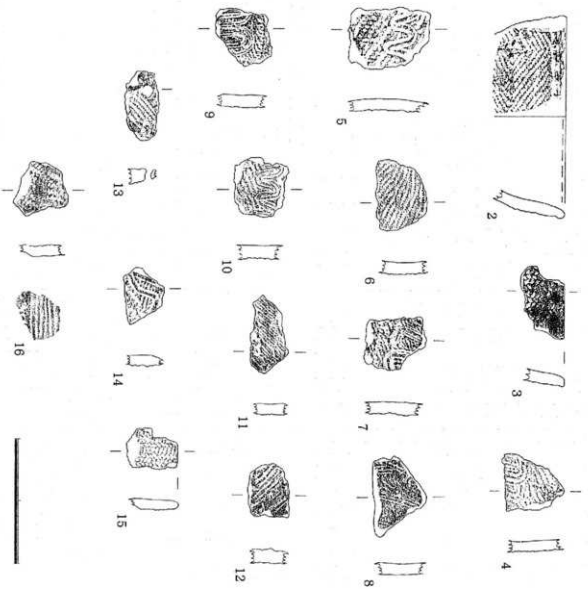


图 27 出土遗物(纹文土器)

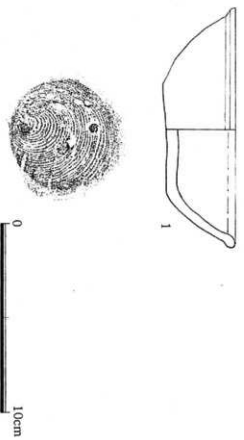
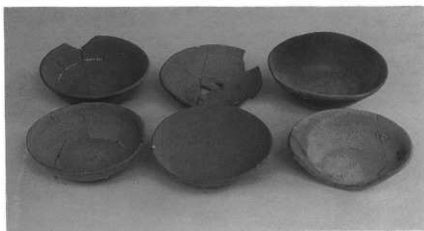


图 28 出土遗物(须惠器环)

写真 38 出土遺物
(須恵器坏)



主要参考文献

- 山崎 一 『群馬古城址の研究』(1978)
- 澤口 宏 『利根川東遷』(2000)
- 桑原 稔 「旧館林藩武具奉行山田家住宅」『ビエネス第6号』(2000)
- 桑原 稔 「旧館林藩士住宅から出土した胞衣壺」『ビエネス第7号』(2001)
- 桑原稔・家泉博・宮沢朋子 「上州の重要民家をたずねる 39」『上州路No.316』
- 国土地理院 『1:25,000 土地条件図の見方と使い方』(1986)
- 国土地理院 『土地条件図調査報告書(古河地区)』(1980)
- 群 馬 県 『群馬県史資料編1 原始古代1 旧石器・縄文』(1988)
- 群 馬 県 『群馬県史資料編2 原始古代2 弥生・土師』(1990)
- 群馬県林務部 『群馬県の貴重な自然 地形・地質編』(1999)
- 群馬県教育委員会 『群馬県遺跡台帳・東毛編』(1971)
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『群馬県遺跡大辞典』(2000)
- 佐倉市教育委員会 『佐倉武家屋敷解説シートNo.3 武家屋敷から出た胞衣埋納容器』
- 足利市教育委員会 『足利市遺跡地図』(1989)
- 板 倉 町 『板倉町史通史上巻』(1985)
- 板 倉 町 『板倉町史別巻九資料編板倉町の遺跡と遺物』(1989)
- 邑楽町教育委員会 『邑楽町の遺跡(高島・中野地区)』(1988)
- 邑楽町教育委員会 『松本23号墳発掘調査報告書』(1988)
- 邑楽町教育委員会 『毘沙門古墳発掘調査報告書』(1986)
- 千代田町教育委員会 『千代田町の遺跡』(1995)
- 明和町教育委員会 『矢島遺跡河川敷部分試掘調査報告書』(1995)
- 明和町教育委員会 『矢島遺跡調査報告書』(1991)
- 館 林 市 『館林市誌・歴史篇』(1969) 『館林市誌・自然篇』(1966)
- 館林市立図書館 『館林双書』第1巻～28巻
- 館林市教育委員会 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集～35集
- 館林市教育委員会 『茂林寺沼及び低地堰原調査報告書』第2集(1986)
- 館林市教育委員会 『館林古環境復元図 館林城郭・城下町解説書』(1996)
- 館林市教育委員会 『たてばやしの民俗』(1999)

抄 録

ふりがな	たてばやししないいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書						
副書名	—————			巻次	—————		
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書			シリーズ番号	第36集		
編集者名	黒澤文隆 高橋一哲			編集機関	館林市教育委員会		
所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町1-1						
発行年月日	西暦2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
日向古墳群	日向町字最ノ神	1207 3	—	—	2000 2000	423.00	露天駐車場
外加法師	加法師町	1207 39	—	—	2000 2000	4,000.00	学校仮校舎
館林城跡・城下町	尾曳町	1207 33	—	—	2000 2000	565.28	建物解体
萩原	苗木町字萩原	1207 98	—	—	2000 2000	338.93	個人専用住宅
大袋 5	花山町字大袋	1207 68	—	—	2000 2000	1,000.00	道路
申子	野辺町字申子	1207 143	—	—	2000 2000	500.00	店舗
	野辺町字申子	1207 143	—	—	2000 2000	2,138.00	露天自動車展示場
林	赤生田町字上新田	1207 120	—	—	2001 2001	12,401.79	産業団地
宮内	赤生田町字宮内	1207 113	—	—	2001 2001	19,048.00	産業団地
遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
日向古墳群	墳墓	古墳	—————		埴輪片		
館林城跡・城下町	城館址	近世	—————		壺	近世武家屋敷跡	
外加法師	散布地	縄文	—————		—————	破壊	
萩原	散布地	平安	—————		—————		
大袋 5	散布地	平安	—————		—————		
申子	散布地	縄文・古墳・平安	土坑1基		土師器甕片		
林	散布地	土師	—————		—————		
宮内	散布地	縄文・古墳・平安	溝址1条、 遺物集中箇所3箇所		須恵器坏		

館林市埋藏文化財発掘調査報告書 第36集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館 林 市 教 育 委 員 会
印 刷 所 オ ー ラ 印 刷 有 限 会 社
発 行 年 月 日 平 成 1 3 年 3 月 3 1 日



文化財登録シンボルマーク
数々の文化と歴史を今に伝える